

チームの戦術から見る EURO2004 の統計的解析

2001MM065 大西 広晃

指導教員 松田 眞一

1 はじめに

2004年、ヨーロッパで No.1 を決める EURO2004[1] が開催された。次々と優勝候補のチームが負けていく中、この大会を制したのは意外にもギリシャだった。世界での活躍や知名度を見れば、個々の能力は他の強国に劣っていることが明らかなギリシャが、なぜ優勝できたのか。ギリシャの戦術に何か特徴があったのではないかと、チームデータを集め、解析していきたいと考えた。また今大会準優勝のポルトガルとの戦術の違いについても解析していきたい。ギリシャの優勝はたまたまの結果であり、まぐれであるといわれることもあるが、なんとか戦術の違いを見つけ出し、ギリシャ優勝の真相に少しでも近づきたい。

2 データについて

ギリシャ、ポルトガルが決勝リーグに入ってからそれぞれ3試合を、ビデオを見てデータを集めた。試合はギリシャについては、フランス戦、チェコ戦、ポルトガル戦の3試合のデータを集めた。ポルトガルについては、イングランド戦、オランダ戦、ギリシャ戦の3試合のデータを集めた。攻撃面に注目し、どのエリアから攻め込んだのかという「起点」、プレーが途切れるまでに要した「パス数」と「時間」、プレーが途切れた要因を調べた。また、エリア内に攻め込むことができた場合とエリア外でプレーが途切れた場合とシュートまでいった場合を分けて考える。

3 解析方法

数量化 II 類とクラスター分析を用いて解析した。

4 解析結果 I (数量化 II 類)

4.1 ギリシャ vs フランス

表1 エリア内 (ギリシャの対フランス戦)

アイテム	カテゴリー	スコア	範囲	偏相関係数
起点	1(右)	-0.028	0.060	0.021
	2(左)	0.011		
	3(中央)	0.033		
パス数	1(1、2、3回)	-0.263	1.752	0.350
	2(4回以上)	1.489		
時間	1(0~10秒)	0.784	3.137	0.631
	2(11~秒)	-2.353		
外的基準	1(クリアー)	0.381	相関比	0.432
	2(カット)	-0.512		
	3(ミス)	-1.748		
	4(キーパー)	0.244		

エリア内に攻め込んだ場合は、相関比 $\eta^2=0.432$ であ

るから、重相関係数 $R=0.657$ となり、精度としてはある程度良好であるといえる。パスを多めに回し、時間をかけないときに「クリアー」されることもあるが、「キーパー」まで攻め込むことができている。逆に、パスをほとんどせず、時間をかけて攻め込んでも「カット」されて、せっかくエリア内に侵入したのに抑え込まれているか、「ミス」というようにお粗末な結果になっている。エリア外でプレーが途切れた場合は、パスを多く回し、時間をかけずに攻め込もうとすることは、とても有効的であるのだが、素早くパスを回しながら攻めなければいけないので、「ミス」というリスクも高くなっていく。また、うまくいきそうでもエリア外であるならば、「ファウル」で止めてしまうのもうまいディフェンスの一つの手である。フランス戦ではそれがよくわかる結果となった。

4.2 ギリシャ vs チェコ

パスをあまり回さず、時間をかけずに「キーパー」まで攻め込んでいることから、完全にカウンター攻撃で攻め込んで成功しているといえる。パスをせず、時間をかけないカウンター攻撃の特徴として、相手が攻め込んできたときにうまくボールを奪ったり、ミスをしてもらえば、相手は攻撃に意識がいつているので守備が手薄になっていく。そこを一気に攻め上がることができれば相手はとても対応しづらく、ピンチを迎える。この試合ではとてもうまくギリシャのカウンター攻撃が成功しているといえる。エリア外でプレーが途切れた場合は、右よりからギリシャらしくパスを回し、時間をかけずに攻め込もうとするのだが、「ファウル」されたり「オフサイド」にかけられてしまっている。

4.3 ギリシャ vs ポルトガル

エリア内に攻め込むことができた場合は、左サイドからパスを回して、時間をかけずに「キーパー」まで攻め込んでいることがわかる。3試合とも「キーパー」まで攻め込めた場合は左サイドから時間をかけない攻めが成功している。この攻撃パターンはギリシャの得意な攻めであるといえる。エリア外でプレーが途切れた場合でも、左から攻め込もうとしている。ギリシャの得意な攻めは、とても有効的である。相手に「クリアー」されても完全にボールを奪われているわけではないので、クリアーボールを拾えれば攻撃を続けることができる。また、「ファウル」で止められてもギリシャボールで試合が再開されるので、もう一度攻撃を組み立てることができる。中央から攻め込もうとしても相手に「カット」され完全に抑え込まれたり、「ミス」して自滅してしまっている。やはり中央の密集した場所では個々の能力

の劣るギリシャは不利であると思われる。

4.4 ポルトガルの攻撃の特徴

3試合のデータから、ポルトガルの攻撃がうまくエリア内に攻め込めている場合の特徴として、あまりパスを回さず、時間をかけてボールをキープし攻め込んでいる傾向がある。個人の能力はトップクラスであるので、個人技による攻撃が中心になってきていると思われる。ただ、時間をかけての攻撃では、よく「ミス」で終わる傾向にもあった。これは、やはり相手も決勝リーグに進んでくるほどの実力のあるチームであるので、長くキープしていれば、当然マークも厳しくなり、焦って「ミス」してしまうのではないと思われる。サイドからの攻撃を得意としている傾向にあるが、試合によってどちらのサイドから攻め込んでいるかが片寄ったり、一人の技術に頼りきってしまう部分は直していかなければいけない。個人技中心の攻めで決勝戦に進むことができるポルトガルに、チームプレーが身についたときは恐ろしく強いチームになるはずである。

5 解析結果 II (クラスター分析)

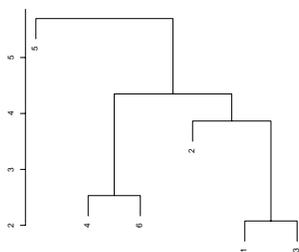


図1 エリア内に攻め込むことができた場合

1. ギリシャ vs フランス
2. ギリシャ vs チェコ
3. ギリシャ vs ポルトガル
4. ポルトガル vs イングランド
5. ポルトガル vs オランダ
6. ポルトガル vs ギリシャ

グラフより、3つの群に分けることができる。1群が5、2群が4、6、3群が2、1、3である。3群についての特徴として、全てギリシャの試合が集まっている。これはギリシャの戦術がどの試合でも一致していることを示している。フランス、ポルトガル戦では左サイドから、パスを回し、時間をかけない攻めがうまくいった。素早くカウンター気味で攻め込んでいるわけだが、パスも多く回していることからチーム一丸となって攻めている。いわば、チームプレーによるカウンター攻撃ということができる。チェコ戦では、左サイドから、パスを回

さず、時間をかけない攻めがうまくいった。パスを回していないことから、相手の攻撃を止めてから、個人による技術で攻め込んでいるはずである。いわば、単独でのカウンター攻撃ということができる。やはりギリシャはカウンターによる戦術を得意としていることがいえた。

2群のポルトガルの攻撃について、パスを回さず、時間をかけての攻撃の回数が多い。この攻撃はあまりパスをしていないことから、個人による突破からエリア内に侵入していったり、センタリングを上げている。個人技でうまく攻め込んでいるといえる。3群が少し遠いところにあるが、この試合ではポルトガルの個人技による攻めができていないといえる。今大会、オランダはとても調子がよく、この試合もボール支配率はオランダがポルトガルを上回っている。よって、ポルトガルは自陣でのプレーの時間が長くなった。相手は前進してくるので、自陣でボールを奪ったときに素早いカウンターで攻め込んで成功していると思われる。左サイドからの攻撃がうまく「キーパー」まで攻め込めていたのだが、オランダにボールを支配されていて、なかなか攻撃させてもらえず焦りや不安があっただろうが、そこは左サイドでプレーするベテランのフィーゴという世界トップクラスの選手が、うまくチームをコントロールして攻め込んでいると思われる。いうなれば、フィーゴを中心とした素早い攻めということができる。ポルトガルは左右から個人技で切り崩すことを得意ということができる。

6 まとめ

ギリシャはチームプレーによるカウンターでの戦術を得意としていることがわかった。ギリシャの守備中心の戦術を評価しない人々が多いが、試合に勝つための効率的な戦術であるといえる。ポルトガルは個人技による戦術を得意としていることがわかった。2チームにはお互いが得意とする戦術があったわけだが、サッカーのような団体競技で一番大切なものはなんなのかを教えてくれる結果となったのではないだろうか。

7 おわりに

自分で考えていたギリシャとポルトガルの戦術の違いがうまく分かれてくれてよかった。それぞれのチームのこれからの修正点を見つけることができたと思う。今まではゴールシーンを中心にサッカーを見てきたが、本研究を終えて、チームがどのような戦術を持って試合に挑んでいるかを見るようになり、いつもと違う視点からサッカーを楽しむようになった。ビデオからデータを集めようとする、映像は攻撃を中心に映すので守備のデータを集めることができなかったのが残念である。

参考文献

- [1] EURO2004 オフィシャルサイト,
<http://jp.euro2004.com/>.